

合田求吾の『紅毛医言』について

長 与 健 夫

はじめに

江戸時代の医学史上、永富独嘯庵や合田求吾のことについては、この道の専門家の書、郷土史家の研究及び総説的な図説(九)を除いては、殆んど触れられていない。しかし筆者は、この二人こそわが国医学の近代化の先駆者として、医学史に銘記されて然るべき人達と思っている。

独嘯庵（享保十七年—明和三年・一七三二—一七六六）は、江戸中期の人で、僅か三十五歳でこの世を去った薄命の医師であった。若いころから「親試実験」をモットーとする古医方を学び、師の吉益東洞や山脇東洋の教えをうけて実学を志し、三十歳の宝暦十二年（一七六二）、たまたま長崎からの帰途、彼の郷里である赤間関（山口県）に立寄った合田求吾の話を知り、長崎行きを思い立ち、「通詞の大先達・吉雄耕牛からオランダ医学の概略とその真髓をきき、『漫遊雜記』にそのことを記している。また求吾が著した『紅毛医言』の序文に「紅毛ノ政 人ヲ剝グヲ禁ゼズ。故ニ病治セズシテ死セバ必ズ剝グ。是ヲ以テ諸病ノ因ルトコロ瞭然トシテ掌ヲ指スガ如シ……」とも書いてある。公に解剖することが認められていなかった封建制度下のこの時期に、このような革命的な言辞を吐くことには随分と勇氣がいったことであろうが、彼は信

念の人であり、また先見性をもった執念の人でもあった。

筆者は、独嘯庵にこのような序文を書かせた合田求吾がどのような人であったのか、また彼の書いた『紅毛医言』がどのような内容のものであったのかを知りたかったが、なかなか手がかりが掴めなかった。

たまたま山本四郎氏の著書『小石元俊』(人物叢書143・吉川弘文館)の中に、この『紅毛医言』の稿本が坂出博物館に所蔵されているとあったので、同館に問い合わせたところ、それは坂出の鎌田共済会郷土博物館に所蔵されているとの返辞を得たので、早速同博物館に閲覧の希望を申し出て、この一月下旬現地を訪れ、同館の数多い所蔵本の中から『紅毛医言』を取り出して見せていただく機会を得た。以下、合田求吾と彼の著した『紅毛医言』の内容の概略を紹介し、彼の偉業と功績とを讃えたい。

合田求吾の略歴

「讃岐の四大医」と題して書かれた岡田唯吉氏(鎌田共済会調査部主事—当時)の文を基にして、合田求吾の略歴を紹介すると、求吾は享保八年(一七三三)に現在の香川県三豊郡豊浜の医師の家に生まれた。名は強、字は千之、通称は求吾(温恭ともいう)。父祖の業をうけて医を志し、幼いころは合田又玄、高橋柳哲に学び、若くして開業したが生業非常な勤勉家で、医術の行い難いことや学理上に疑問の多いことを悟り、宝暦二年(一七五二)二十九歳の折に京都に出て、松原一閑齋について漢方を、香川修庵、山脇東洋について古医方を数年に亘って学んだがなお満足せず、さらに江戸に出て同郷の先輩望月三英に学んで帰郷した。その後もしばしば出京して研究を怠らず、東洋の『蔵志』の影響をうけてか(筆者註)、紅毛には変わった方があり、これを学べば治術に益するところ大であろうと、宝暦十二年(一七六二)三十九歳のときに長崎に行き、大通詞であり医師でもあった吉雄耕牛および弟の蘆風(あふか)に従って紅毛内治書を訳してもらい、それを『紅毛医言』として書きとどめた。

帰郷の途中、馬関の永富独嘯庵、筑前の亀井南溟、安芸の恵美三伯らと交りを結び、帰郷後は長崎行きの効果があつてかその業日々妙域に達し名声大いに上り、遠近より来って治を乞う者が門前市をなしたという。かくして関西刀圭界の巨星として人々の信頼と尊敬を集めるにいたつたが、安永二年（一七七三）五十歳で他界した。その著書には『紅毛医言』のほか『野学草稿』『弁医文集』などがある。

『紅毛医言』の概要

この本は和綴（まじ）の五冊一組の草稿本とその整理本一冊（未完）で、各巻の表紙には「紅毛医述」（巻一）とあつたり「西洋医述」（巻五）と書かれたりもしている。巻一の冠頭言の終りに「宝曆十二年閏四月、讃州 合田強 崎陽寓居中にて書す」とあるので、求吾が長崎の吉雄耕牛宅に滞在中に書かれたものであることが知られるし、巻末には「宝曆十二年正月出故郷 二月十四日 来長崎、閏四月二十七日 去長崎、五月 帰故郷、崑陵山人」とあるので、彼の長崎滞在が二か月半ほどであつたこともはっきりする。

また整理本の巻末に昭和四年十月十日、当時東大医学部の名誉教授であつた呉秀三先生が所蔵しておられた写本を、鎌田共済会調査部が再写したことも記録されている。

求吾が巻頭に述べているように、この稿本は彼が吉雄耕牛宅に寓居し、耕牛及び弟の蘆風から蘭書の和訳を聞きながら書きとどめたいわば「日記風の研究ノート」とも言うべきもので、各巻の欄外に各項目の記事を書いた日付がのっている。また巻初には次のような記述も見られる。「蛮人異病アリテ死ス者 腹ヲ刳リソノ臟腑筋骨ヲ觀、ソノ病形、病源ヲ察シ、治術ノ一助トナス。……ソノ精ヲ欲求スル者崎陽ニ行キ之ヲ研求スル也。ソノ図、吾ガ邦山脇氏蔵志、栗山氏臟図ト符合ス。古方ヲ好ムモノ参考スベキ也。」

山脇東洋の『蔵志』の刊行（一七五九）の三年後、杉田玄白、前野良沢らの『解体新書』の刊行（一七七四）の十年以上

も前に、すでに次に述べるような講釈が長崎で行われていたことや、現在の医師が見ても身近かに感ずるような症状や処方に関する記載、さらに模写された詳細な解剖図が載っているのには新鮮な驚きを禁じ得ない。

『紅毛医言』の内容

前に述べたように、この『紅毛医言』は求吾の著作というよりは、彼がその日その日に耕牛や蘆風から聞いたオランダの医学、医療、とくに内科に関する知識や技術情報をノート風に書きとどめたものであるので、一貫性に欠ける憾みがあるが、その内容の豊かさには驚かされる。

求吾自身、巻一の冠頭に「嘗テ聞ク 紅毛ノ医タゞ外科アルノミニシテ 内科アルナシト。余ヒソカニ之ヲ疑ウコト数年 今一旦ニシテ氷解ス。是ニオイテ随ツテ聞キ随ツテ筆シ 遂ニ積ツテ卷ヲナス」と、新しい知識を得た喜びを率直に述べているが、また聞き間違いがあるかもしれないので、それに気付いた人は訂正してほしい、とも言っている。

以下この稿本の内容の概略を紹介してみよう。

病名と症状について

病名としては、中風、瘰癧、癩、梅毒、狂犬病などがあげられている。そしてそれぞれの病名には片カナでオランダ語が付せられ、簡単な解説が加えられている。例えば

梅毒（スバンスボタ） 無病人ニテモ 毒アル人ニ染マバ移ル。親ニテモ又移ル。始メハ陰茎ニ瘡デキル。両肢ニ筋力張リテシコロガデキル。又脇ノ下ニモデキル。色赤ク痛ミ甚ダシ。遊女ニ交レバ必ズ移ル。

狂犬病（ラウレンス・ヘイステル） 犬ニ限ラズ諸獸共ニフルレバ、ソノ毒ニ中ル。狂犬ニナラバ尾ヲ股ニ挟ンデ舌ヲ出シ唇ニ沫ヲ吐ク。是レ狂犬ノ証拠也。……

など、当時のオランダではどのようなことが教えられていたのかの一端を覗うことができる。（腫瘍や肺癆などについての記

載は見当らない。―筆者註)

症状としては、熱病、腫脹、疝氣、痢、狂、癩、黃疸、嘔吐、水腫、痘疹、咳嗽、小便閉、吐血、咽頭痛、卒倒などがあげられているが、中には難しい漢字で理解出来ないものもある。昔も今も、また洋の東西を問わず、いろいろな病氣やいろいろな症状のあることや、その漢字表現法が今も変わらないものが多いことも知られる。

薬方について

卷二には薬方のことが主として記せられており、散薬、吐薬、下剤、煎湯があげられている。処方として「サフラン七厘、ヲクリカンキリ三分、サルホロネル各一分」とか、サルホロネルについては「焰硝ト硫黄ト合セ焼キタルモノ」などの註釈もみられ、煎湯の項には、シナモン肉桂の名もみられる。

卷三以降には、薬についての記述と病氣についての説明に主体がおかれているが、その中には、次のような興味あるメモも記されている。「油ノ中ニ水ノアルハ コヨリヲ水ニツケテ油ノ中ニ入レレバ、水ハコヨリヲ伝フテレルモノナリ」。また梅毒の治療には水銀を主薬として用うべきことも記されている。(かなりのページがこの処方することに当てられており、大事なことを見落したおそれがある。より詳しいことを知りたい方は直接、坂出の鎌田共済会郷土博物館へお出でになることとお薦めする―著者註)

種痘については次のような説明が加えられている。「エシット(エジプト)国ヨリ始ル。始メハ疑イ後人信ジ、紅毛イキリス是ヲナス。罪人ヲ以テ試シタリ。今善痘ノ膿ヲトリ 手足ニ鍼ニテ少シ疵付ケテ其所エ膿ヲ付ケテ 上ニ布ヲ置キ巻キオク也」。ジェンナーの牛痘による種痘が成功したのは一七九六年であるので、それに先立つこと三十余年にこのような予防法が行われていたことが、この記載によって知られる。

また直接医療とは関係ないが、次のような興味あることもメモ風に記されている。

「天竺ノ中ニ 夫死スレバ土葬ニス。其妻ハ薪ヲ積ミテ火ヲカケ、其ノ中ニ死スルト云ウ」

「日月ヲ祭ル外ハ仏神トイウモノナシ」

「紅毛人ハ 八十歳、九十歳マデ生キルモノナリ」

これらは蘭書の直訳とは思えないので、おそらく雑談中に耕牛か蘆風が言ったことを求吾が書きとどめたのであろう。

またこの稿本のもう一つの大きな特長は、病氣、症状、治療法についての記載とともに、蔵府、骨節図などとして解剖図が豊富に載せられていることである。その図の中には誤りや不確かなものもみられるが、ここに掲げる図のように、現在のわれわれの知識からしてもそう外れていないものが多く、図にはいくつかの簡単な説明が加えられており、小腸と大腸とは明確に区別されている(図1~3)。

宇田川玄随の『紅毛医言』評

オランダ内科の紹介者として、医学史上よく知られているのは宇田川玄随(一七五五—一七九七)である。玄随は、杉田玄白、前野良沢、大槻玄沢ら『解体新書』以後の蘭学発展の主流に連なる人で、桂川甫周のすすめでヨハネス・ゴテル(Johannes Gorter 1689-1762)の内科書(一七四四刊)を和訳し、寛政四年(一七九二)『西説内科撰要』と題して刊行した。ゴテルはヘルマン・ブールハーフェ(Hermann Boerhaave 1668-1738)の門下生であり、ここにはじめて現代の内科学の源流ともいべきライデン系の内科学がわが国に知られるようになったという点で、玄随の功績は大きい。

事実この書の刊行以後、彼の養子の宇田川玄真や、緒方洪庵の師匠である坪井信道らによってその内容が高められていったが、オランダの内科学の概要が玄随以前に全く知られていなかったこと、この「紅毛医言」を見れば明らかである。

興味を唆られるのは、玄随が「西説内科撰要」を刊行した翌年の寛政五年(一七九三)にこの『紅毛医言』の整理本(未完)を見て、次のように言っていることである。「……通編奇ナルコトハ奇ナリ、然レドモ鹵莽(粗略)減裂ツイニ章ヲ

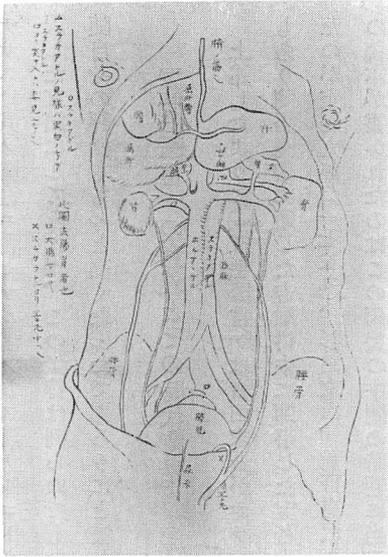


図 2



図 1

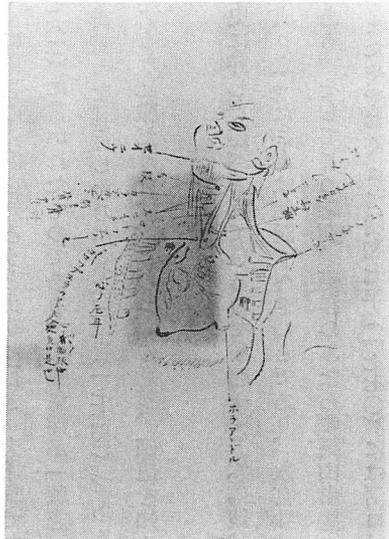


図 3

図はいずれも鎌田共済会・郷土博物館
 所蔵の『紅毛医言』中より復写

ナサズ。其ノ蘭籍ニ習セザル者ノ為ス所ナルコト必セリ……」。蘭語の解説、蘭書の習得に苦心慘憺してゴルテル本を和訳した玄隨にしてみれば、この気持は判らぬでもないが、表面的なことに拘こわらずその内容をもっと評価しておれば、玄隨自身の評価ももっと高くなつたであらうにと惜しまれる。

『紅毛医言』の意義とその時代背景

上述したように『紅毛医言』は合田求吾がオランダ医学とくに内科の内容を知ろうと長崎に行き、大通詞であり医師でもあり蘭語蘭書に通じた吉雄耕牛に師事した宝暦十二年（一七六二）に書かれたものである。山脇東洋が「蔵志」を著わしたのが宝暦九年（一七五九）、杉田玄白、前野良沢らが「解体新書」を刊行したのが安永三年（一七七四）であるので、この稿本が書かれたのはこの両書の間期の時期に当るが、このような認識だけでは、この稿本の意義、価値を知るには不十分である。

東洋が腑分けを行うにいたつた動機や経緯については医学史に詳しく述べられているので省略するが、「親試実験」をモットーとする古医方家の人達の思想の延長上に『蔵志』が成り立ったことは銘記すべきことであり、永富独嘯庵や合田求吾もこの古医方の流れを汲み、東洋に教えを乞うた人達である。そしてこの時期、東洋のみならず栗山孝庵や伊良子光頭も『蔵志』刊行の前年（一七五八）に腑分けを行つており、またややおくれて明和七年（一七七〇）には河口信任も『解屍篇』を著わしている。

しかしこのような死体の解剖に対して、儒学を奉ずる漢方医は勿論のこと、古医方家の中にも吉益東洞などは『医断』の中で「このようなことは医療には何の役にも立たない」と反対しているし、「人道に反する」「非倫理的である」との非難の声が圧倒的な時代でもあった。

賀川玄悦が『産論』を著わしたのは明和三年（一七六六）で、彼は蘭学を学んだわけではないが、自らの経験によって妊

娠、出産に関する正しい知識とそれに基づく処置法を確立した。この一事をもってしても、医療が旧態依然とした陰陽五行説に基づく思弁的、観念的な儒医の域を脱しはじめたことが覗かれる。また天文学史上で有名な麻田剛立は、彼独自の研究から既に一七六三年に日食を予測しているが、もともと医師であり医療も行っていた彼は『蔵志』にも注目して、その記載に血管のことが不足していることを指摘している。独嘯庵の教えをうけた小石元俊が、師の教えに従って京都で病理解剖の先駆けともいえる腑分けを行ったのは天明三年（一七八三）のことであり、世の中は徐々ながら即物究理の方向に動きはじめていた。

医学医療以外の領域に目を転じてみると、平賀源内が田村藍水とともに江戸で物産会を開いたのが宝暦七年（一七五七）、これを基にして『物類品隲』を著したのが『紅毛医言』と同じ一七六二年で、田沼意次の治政の頃に入っていたこともあってか、この頃には既に人々の間に「物」に対する興味と関心が全国的に拡まっていた。また『解体新書』刊行と同じ一七七四年に、本木良永は『天地二球用法』を著わして、コペルニクスの地動説をわが国に紹介している。

八代將軍徳川吉宗が、青木昆陽、野呂元丈らに蘭語の解説を命じたのが元文五年（一七四〇）ごろであるので、それから三十年も経たぬうちに、たとえ藩に仕える医師や一部の知識人の間ではあったにせよ、蘭書を通じてその実学的、即物的な物の考え方が受容されるようになり、自然や人間に対する客観的な認識が飛躍的に高まったことが、独嘯庵や求吾の長崎ききの動機にも連なっていたと考えられる。

しかし松平定信の治政の頃になると「寛政異学の禁」によって象徴されるように、それまでは主として藩医の自発的意図によって順調に発展してきた蘭学が、それを妬み憎む勢力によって阻止されるようになり、十九世紀の化政期に入ると折柄次第に昂じてきた外庄の影響もあって蘭学は次第に海防という幕府のご用学へと方向を転じさせられ、医療の面でも漢方と蘭方の相克は次第にはげしさを増してくる。

それはともかくとして、未だオランダ医学についての知識が極めて低く漢方万能であった時代に、蘭人に接し蘭語を解

し蘭書を読み、それを自分だけの特権とせず、『紅毛医言』にあるような内容を独嘯庵や求吾のみならず多くの人に語り伝え、その後の多くの蘭学者の長崎詣での因をつくった吉雄耕牛は、わが国の医学史上偉大な先駆者、推進者というべきであろう。ただ彼が長崎通詞という身分であったためか、過少評価され勝ちであるのは残念なことである。

おわりに

永富独嘯庵といい、合田求吾といい、江戸時代の医学の通史ではその名の知られることの少ない人達である。しかし通史で名の知られていないということが直ちに人の価値を決めるものではない。そのような多くの人達の中には一般的によく名の知られている人達よりも、もっと先見性があり、実のある立派な仕事をした人々がいたことをわれわれは知るべきであろう。江戸期の医学史上、独嘯庵や求吾はこのようなカテゴリーに入れられるべき人達ではあるまいか。

歴史の流れ、学問の進歩の観点からすると、『解体新書』刊行の以前と以後のオランダ医学の受容態度の違いについては、次のようなことが言えるように思う。

すなわち、以前期には蘭書の内容を不十分なながらも理解出来たのは江戸の青木昆陽、前野良沢を除くと長崎通詞のみであり、その盟主ともいえる吉雄耕牛が才覚と努力および大通詞という高い地位とから舶載の蘭書を手に入れて読み蘭語を話し、出島に自由に入出して蘭館医に質問し、他人の知る術もない知識技術や情報を得ることが出来た。そしてそれらを独嘯庵や求吾など長崎を訪れた人々に伝えることは出来ても、彼の職業柄かその範囲を出ることがなかったのに対し、以後期には『蘭学階梯』によって表わされる大槻玄沢の決意、努力とそれをバックアップする耕牛をはじめとする長崎系通詞（志筑忠雄、馬場佐十郎など）の働きによって少しずつではあるがオランダ医学の内容をより詳細に、より適確に知り得るようになり、舶載医書の翻訳、刊行によって近代的な医学、医療の系統的理解への道が拓け、求吾や玄随によって紹介された内科学はやがて薬学、薬理学、生理学、化学へとその裾野を拡げていった。

実用のみの以前期と、実用に実理の加わった以後期との差は、この稿本を見ても感ぜざるを得ないが、独嘯庵や求吾の功績は、この両時期をつなぐ橋渡しの役目をなした点にあるとも言えるのではあるまいか。長崎で得た知識を独嘯庵が小石元俊に伝え、後に元俊が病理解剖を通じて東西の蘭学者の交流に貢献したことが何よりも雄弁にこのことを物語っている。彼らの生きた時代、即ち江戸の中期、西暦にして一七五〇年代から六〇年代を「わが国医学の黎明期」とみる筆者の理由もここにある。

なお、吉雄耕牛とその弟の蘆風がどのような蘭書を基にして、独嘯庵や求吾に医学、医療の講釈をしたのかは、ただ紅毛内治書、蘭方内科書とあるのみで確かめることは出来なかったが、『紅毛医言』の記載内容と模写された図、それに蘭書の刊行年などから、ゴルテル内科書が最も有力視されるが、この辺りのことについては将来の研究に俟ちたい。

追記

合田求吾には大介(号蘭齋)という弟があり、求吾が長崎から帰郷後この弟を耕牛、蘆風兄弟の許もとに学ばせていることが、大介のご子孫である合田慶助氏(丸亀市在住)宅に掲げられてある額および同家に所蔵されている山本四郎氏の「合田求吾兄弟の伝記資料について」^(一)と題する記録書によって明らかとなった。

二度までも弟を長崎に送り出していることから、求吾がいかに吉雄兄弟に深く傾倒していたかが推察される。また大介の治術も兄求吾と伯仲していたという。

この小論を書くにあたって、貴重な資料の閲覧にお世話とご協力をいただき、また郷土史家の文献探索にお骨折りをいただいた坂出の鎌田共済会・郷土博物館の山地正夫館長、ならびに古文の解説にご教示をいただいた名古屋大学医学部の酒井恒夫名誉教授に御礼を申し上げます。またご所蔵の貴重な資料の閲覧発表表に快くご承諾をいただいた丸亀市在住の合田慶助氏に感謝の意を捧げ

参考文献

- (一) 中野 操『大坂名医伝』思文閣出版(昭和五十八年)。
- (二) 藤野恒三郎『医学史話・杉田玄白から緒方洪庵』菜根出版(昭和五十九年)。
- (三) 酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍(昭和五十七年)。
- (四) 富士川游『日本医学史綱要Ⅰ、Ⅱ』(小川鼎三校注) 平凡社(東洋文庫262)(昭和六十一年)。
- (五) 小川鼎三『医学の歴史』中央公論社(中公新書39)(昭和五十三年)。
- (六) 堀江健也「本邦最初の病理解剖提唱者、永富独嘯庵の業績」(医学選粹17) 日本医学文化保存協会(昭和五十四年)。
- (七) 草薙武吉「讃岐蘭学の先駆者合田強の『紅毛医言』に就て」香川県学友会雑誌部『学友』12/15(昭和十一年)。
- (八) 竹内庸夫「蘭方内科の先駆者合田求吾」坂出文化協会『海橋』9号(昭和五十八年)。
- (九) 宗田 一『図説・日本医療文化史』一四六、一四八、一七〇、一七四頁、思文閣出版(昭和六十四年)。
- (一〇) 山本四郎『小石元俊』吉川弘文館(人物叢書113)(昭和四十二年)。
- (一一) 岡田唯吉「讃岐の四大医について」鎌田共済会・郷土博物館蔵。
- (一二) 山本四郎「合田求吾兄弟の伝記資料について」合田慶助氏蔵。

(追記)

右の整理本『紅毛医言』一冊は、『香川県史』芸文』七八三―七九一ページに全文活字化掲載されている。

(愛知県がんセンター名誉総長)

“Kōmō Igen” written by Gōda Kyūgo

by Takeo NAGAYO

In 1762, three years after the publication of “Zōshi” (the first anatomical book written by a Japanese) by Yamawaki Tōyō, Gōda Kyūgo, one of the disciples of Tōyō, went to Nagasaki. During his two and a half month stay there he learned Dutch style medicine, especially internal medicine, from the translator Yoshio Kōgyū and his younger brother, by the aid of imported Dutch medical books. Kyūgo recorded their lectures in five volume notes and entitled it “Kōmō Igen” (Medicine of the Netherlands). The natures, symptoms and diagnoses of several diseases, including infectious and epidemic diseases and the way of treatments were recorded in the notes.

This manuscript attempts to introduce the contents of “Kōmō Igen” together with its background and stresses the importance of these notes for the beginnings of modern medicine in 18th century Japan. The significance of the “Kōmō Igen” as a historical medical literature is also pointed out.